

鉛筆の言葉

藤島香輔

いつだったか、珍らしく背広姿でいる池部の良ちゃんと会って話をしている
と、ポケットをぐそぐそやっていた彼が不意に黒い小さなものをツマミ出して
目の前につきつけた。

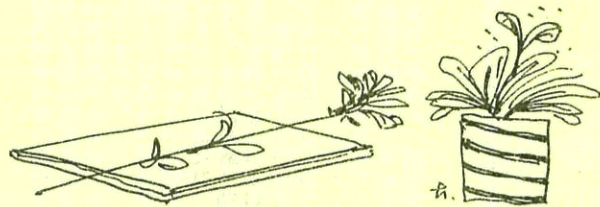
「なんだい、これ？」

「いいから喰ってみろよ」

いきなり喰えといわれても、それは良ちゃんの背広のホコリにまみれている。



バリから来たブベです。
そっと立たせたら、今にも歩いてきそう。
思わず頬ずりしたい様な、あどけない表情は、顔ばかりでなく、手や足の指先まで、細かい神経のゆきとどいた、豊かなセンスから生まれてくるのです。
ブベは、一つ一つ個性をもっています。
それは、製作者自身の趣味と愛情が溢れているものです。



「その背広、いつ着たの？」
「さあて、映画祭のときだから、二年前かな。この鉛を買ったのはバリ。それ以来はじめて着たんだけ」

私はヤケになって黒い鉛玉を口の中へ放り込んだ。苦くて、甘くて、粹いきな味がする。私の内部で、ふっと或るものが甦よみがえった。

「知ってるよ、これ。毎日しゃぶってた。レグリーズっていうんだ」

こんどは良ちゃんが驚ろいた。彼の方はレグリーズという名前も忘れている。私は彼と向い合って喋っているのも忘れて、昔のことを考えた。味覚が幼時の記憶を辿たどらせてくれたのだ。まず思い出したのがボア・ド・ブローニユ、次にパッシイのアバート、そして幼稚園に通う石だたみの道……と、長い間忘れていた風景がはつきりと映像になって険まぶたの裏に浮んで来た。毎朝、私は近くの幼稚園に通い、皮膚の白い少年や少女たちと、小さなバスケットを携もててボア・ド・ブローニユへ遊びに行く。廻転木馬に乗り、一周する毎に手に持った棒で丸い金物の輪を突き通す。レグリーズは、そのようなとき、バスケットの中に入っていた。入れてくれたのは、多分ユゲットというフランス人の女中だったのであろう。六歳のとき、私たちはユゲットと別れて帰国したが、その

後彼女は どうして いるのであろう。モンドールというところが彼女の故郷だと子供心にも覚えていた。人參にんじんの嫌いな私に、彼女は「この美味しい人參は、私の故郷モンドールの名産なんですよ」といつて勧めたものだったが……。あれから二十年、私は二十六歳になり、その間に戦争もあった。ユゲットは、生きていたとしてももういいお婆さんになっているに違いない。三年間のバリ生活だったが、もう道で会っても到底わかるまい。

レグリーズをしゃぶっていた頃から二十年経った或る夏の午後、私はサイゴンのカティナ通りでレグリーズを買う。世間からは太陽旅の戦後派アポロのと呼ばれても、やはり人間なんて芯はセンチメンタルな動物である。

幼い頃、バリの幼稚園で優等賞をとったほどのフランス語も、長ずるに及んで片かたなしとなり、鉛玉一つ買うにも通訳付きとは我ながら情けない。それでも、南国の強烈な太陽の照りつける通りに出て、奇妙な形をした黒い鉛玉を口に放り込むと、ひどく嬉しくなった。景色だつて悪くはない。サイゴンは「東洋の小パリ」と呼ばれる街で、フランス人も多い。コンチネンタル・ホテルの、路上にせり出したテラスで苦いコーヒーを飲みながら街を眺め廻すと、南

国の情熱とパリのしとやかさが奇妙にミックスされて独特の雰囲気を作り出して
 いるのに気づく。英領植民地は鋭いが、仏領植民地はねむたい。そして英領
 は煙草がうまく、仏領は食事がうまい。カンボジアとヴェトナムに約一カ月滞
 在し、憑かれた者のようにかたつむりをたべ、ついには大使館の人たちに笑わ
 れた。「あなたはかたつむりをたべる為に旅行に出たのですか!」
 何の為に旅行をしているのか私は知らない。去年はアフリカに行き、今年
 は東南アジアに行った。東京とパリに育ったくせに、ものごとについてからは未
 開地の南十字星ばかり眺めて暮らしている。「何故ヨーロッパに行かないので
 すか?」と人々は訊ねる。「きつと、もう少し年をとったらパリにも行く気
 なるでしょう」と私は答える。そして、そのときはまた街角でレグライズを求
 めるだろう、と心の中で呟く。

(作家)

